

## 偶然発見された無症状の腫瘍内血腫を 合併した小肝細胞癌の1例

なが み はる ひこ<sup>1)</sup> ない とう あつし<sup>2)</sup> ふな つか まさ ひで<sup>2)</sup>  
長 見 晴 彦<sup>1)</sup> 内 藤 篤<sup>2)</sup> 舟 塚 雅 英<sup>2)</sup>  
やま の い あきら<sup>3)</sup> や の せい じ<sup>2)</sup> た なか つね お<sup>3)</sup>  
山 野 井 彰<sup>3)</sup> 矢 野 誠 司<sup>2)</sup> 田 中 恒 夫<sup>3)</sup>  
まる やま り る け<sup>4)</sup>  
丸 山 璃留敬<sup>4)</sup>

キーワード：小肝細胞癌，腫瘍内血腫，非ウイルス性肝癌，  
高分化型肝癌

### 要 旨

今回、我々は腫瘍内血腫を合併した肝細胞癌（以下肝癌）の1例を経験した。症例は72歳の男性で、上腹部エコーにて肝外側区域（S<sub>2</sub>）に腫瘍像を認めた。単純、造影CT，リゾビストMRIにて径約4.5×5.5 cm大の腫瘍像を認めた。肝機能検査は正常でB型，C型肝炎ウイルスとも陰性であり血中AFP値，CEA値も正常であった。腹腔動脈造影では肝外側区域（A<sub>2</sub>）領域の血管陰影は明瞭には描出されなかった。以上より，高分化型肝癌を疑ったが腫瘍の確定診断はできなかった。手術は肝腫瘍（S<sub>2</sub>）を含む肝亜区域切除を施行した。切除標本にて腫瘍は赤色血栓で充満した被膜形成型であり，組織学的に高分化型肝癌であった。文献上，無症状に経過し腫瘍内血腫を合併した6 cm以下の非ウイルス性肝癌症例は自験例が本邦第1例目である。症例報告と同時に肝癌発癌機序，腫瘍内血腫形成機序について文献的考察を加えて報告する。

### はじめに

肝細胞癌（以下肝癌）は転移性肝癌とは違い動脈血流が豊富なため大きな腫瘍でも中心部に壊死

を来すことは少ない。まれには壊死とそれに伴った腫瘍内出血を合併する症例もあり，巨大血腫を来した肝癌を文献上散見する<sup>1-11)</sup>。一般に肝癌患者の約10%が経過中に自然破裂を発症するとされているが<sup>12)</sup>，その大部分は進行性で腹腔内大量出血を来し臨床的に早い経過を辿り<sup>13)</sup>，出血が腫瘍内および被膜下に留まる症例はほとんどない。今回、我々は偶然発見された無症状の腫瘍内血腫を合併した高分化型肝癌の1例を経験した。その

Haruhiko NAGAMI et al.

- 1) 長見クリニック
  - 2) 松江記念病院外科
  - 3) 島根大学医学部消化器総合外科
  - 4) 島根大学附属病院病理部
- 連絡先：〒699-1331 雲南市木次町里方633-1